2005年 卒業研究要旨

学校と家庭の「しつけ」に関する一考察

渡邉　朋子　（7021 - 1100）
指導教官：笹原　恵

この卒業論文は，現在子どもを取り巻く社会的な問題である「児童虐待」と「体罰」に着眼し，現代社会の「しつけ」のあり方について論じたものである．本来，子どもは成長していく過程で，大人から手厚く養育され，庇護されるべき立場にある．それにもかかわらず，学校や家庭で，教師や親から「しつけ」と称する体罰や虐待が横行し，多くの子どもが暴力の被害にあっているという現状にある．

第1章第1節では，学校における体罰の実態について，体罰の定義を明らかにしながら，体罰の禁止法令の歴史や教師による体罰の具体例と現状，さらに体罰がこれほどまでに重大な社会問題として発展してきた背景について考察した．高校野球部の監督が，試合途中に「(指導を守らず) 高めの球を振った」などとして部員の顔を平手打ちし，鼓膜が破れてしまったという事件や，中学校の保健体育の授業中に，生徒が授業を聞かないという理由で，教師が関節技をかけ，腕と足をひねったという事件を見ると，体罰は子どもを管理的に指導する手立てとしても用いられていることが分かる．これは，もはや体罰というよりも，明らかに子どもに対する「虐待行為」である．

また第 2 節では，家庭における児童虐待と体罰の実態について，児童虐待の定義や禁止規定の概念を踏まえた上での分析を試みた．家庭においても，長女に腹を立てた母親が，長女（6歳）がテレビをつけたままにしていたり，部屋を散らかしたままにしていたりしたことに腹を立て，棒でつつくなど暴行し，胸や背中などに全治数ヶ月の重傷を負わせるなど，しつけという名の下に児童虐待が起きていることが明らかになった．

第 2 章第 1 節では，各種の世論調査をもとに，現代のしつけ観やそこに潜む問題点について探った．「しつけ」としての体罰が行われる背景には，体罰を容認する風土が根強く存在することが明らかになった．大人が子どもに対して行う「しつけ」と称した体罰は，学校においても，家庭においても，いまだになくなっていない．実際に，子どものしつけに体罰が必要であるという意見に肯定的である親は，約 7 割にも及ぶことが内閣府が実施した世論調査の結果からわかった．筆者が静岡大学で行った調査でも，しつけに体罰が必要であると回答した学生は男性で 47．5%，女性で 26.6%となっており，決して少なくはない．女性より男性の方が，体罰という暴力に対して肯定的な意見を持っている人が多いこ

とが分かった（第2章第3節）.

また，第 2 節では，子ども観と子どもの人権に対する意識の歴史的変化を踏まえ，子どもの権利条約にみる新しい子ども観について考察した．体罰が世間で容認されている背景として，「愛の鞭論」を論じ，子どもがしてはいけないことをした場合，大人が教育愛を込めて子どもを罰するという考えが誤っていることを述べた．また，子どもの立場から体罰の問題性について論じ，大人が子どもをしつけたり教育したりする中での「苛立ち」や「怒り」という感情をぶつける場合が多いことや，叱っている間に体罰がエスカレートすることなどを述べた．また，体罰が子ども自身に与える影響として，子どもの主体性を喪失してしまうことや，体罰を目撃している他の子どもが悪影響を受けることを述べた．暴力によって子どもを押さえつけることにより，子どもは自分自身で善悪の判断をすることができなくなったり，自分の主張を暴力によって表現するようになってしまうということである． 体罰が子どもに身体的な苦痛を与えるだけでなく，同時に精神的な苦痛も与えることは明らかである.

第3節では，2004年12月に行った「携帯電話の利用と家族についての調査」を用いて，学生が受けてきた虐待経験と，学生の体罰やしつけに対する意識を分析した．調査対象となった男子学生の22.5%が，また女子学生の31.3%が，小学生時代に母親から肉体的苦痛を含む虐待を受けていた．また，父親から肉体的苦痛を含む虐待を受けていたのは，男子学生36.3%，女子学生34.3%であった．精神的な虐待については，男子学生の3.8%が母親から，同様に3.8%が父親から受けていた．女子学生の場合，12.5%が母親から，9.4%が父親から虐待を受けていた．母親よりも父親の方が肉体的暴力を振るう傾向にあり，同性の親の方が，子どもに暴力を振るう傾向にあった．精神的暴力については，女子学生の方が被害が多かった.

学校において，教師から肉体的苦痛を含む虐待を受けていた男子学生は 37.5%であり，女子学生の3.1%を大きく上回っていた．同様に，精神的虐待についても，男性では12.5%であるのに対し，女性では9.4%となっていた．学校においては，男性の方が，教師からの暴力にさらされていることが分かった.

また，調査では虐待した時の加害者（父，母，教師）の態度についても尋ねたが，「一時的にカッとなって」という態度であった者は，父親で79%，母親で67%，教師で78%となっており，「冷静な状態」であった場合をはるかに上回っている（父親18%，母親27%，教師17%）．親の感情のはけ口として，暴力が行われていることが結果として分かった.

最後に，まとめとして体罰の根絶へ向けて，「しつけに代わる子育てを」という意識改革への提言を行った．子どもを「しつける対象」としてではなく，子どもの将来を見据えて，子どもが自立した一人の人間へと成長できるように，大人は子どもを「育んでいく対象」というまなざしで，「子育て」をしていく姿勢が，やがて大人のもつ子ども観を変化させ，体罰への根絶へと結びつくのであると結論付けた.